1997-39

1997年（平成9年）12月19日（金曜日）

週刊読書人

第2215号

アンケート特集 一九九七年の収穫

橋爪 大三郎

立岩真也『私的所有論』（勁草書房）は、臓器移植と生命倫理の問題を、身体に所有権は及ぶかという角度から論じたもの。著者独特のねばり強い、てらいのない文体が魅力である。この問題を考える必読文献となろう。

永田えり子『道徳派フェミニスト宣言』（勁草書房）。このところ拡散傾向にあるフェミニズムに新しい論客の登場だ。徹底した合理性と、生活感覚のバランスがとれていて、読み手に信頼を覚えさせる。性の商品化やミスコン、買春を論じて歯切れがいい。

加藤典洋『敗戦後論』（講談社）は、画期的な論考だ。日本三〇〇万の死者をまず哀悼してから、アジア二〇〇〇万の死者に向き合う。戦後に特有の人格分裂を克服し、歴史主体を形成するための、苦渋に満ちた思索の筋道が示されている。自由主義歴史観の楽天ぶりを突き抜ける、したたかな現実感覚がそこにはある。（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学教授・社会学専攻）

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』

1996. 2. 10発行 pp. 177 朝日新聞　おまけ

性愛のかたち・家族のかたち2

橋爪大三郎

『性愛論』

岩波書店・1995年

性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度で複雑な愛のかたちを持つ。本書は、この性愛をめぐる謎に社会科学的な方法で迫ろうとする試みである。そこでは「性愛の分離公理」（＝性愛領域が他の社会領域から隔てられていること）を軸に、猥褻が現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの帰結であること、性別はイデオロギーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感心に引き寄せられた人たち」におすすめの一冊。

第1653号　1997年9月5日

日本と中国

若い人に読んで欲しい中国関係書3冊

東工大助教授

橋爪大三郎

1948年生まれ。著書に『冒険としての社会科学』など多数。

『中国官僚天国』（王輝 岩波書店）　解放後の中国が官僚主義に苦しめられてきた歴史を紹介する。住居・医療・年金・保育園、すべてまる抱えの「単位」（タンウェイ＝職場）と階級制度の実態をわかりやすく浮きぼりにする。著者の王輝氏自身も官僚だっただけに、情報価値としてはかなり高い。

『小室直樹の中国原論』（小室直樹　徳間書店）

中国的人間関係の原則がいかに日本と違うかを考察する。補助線として取り上げられるのは、刺客。人間と人間の信頼を絶対視する中国人の原点がここにある。

『別冊宝島 中国・危機の読み方』（宝島社）

矛盾を抱えながらぎくしゃく前進する中国社会の実像に肉薄する。

21世紀は、中国の時代。今後も目が離せない。